

【新刊紹介】

朝倉 正 著：異常気象と環境汚染

B 6 版 本文 212 頁あとがき 4 頁

共立出版 科学ブックス 18 650 円

近頃、世界的な規模の異常気象が毎日のテレビや新聞で話題になっているのは、これまでにないことである。気象庁は、先頃、“近年の世界の天候について”と題した最近の天候の異常性と今後の見とおしを発表し、社会的な反響が予期した以上に大きかったようだ。

気象に多少でも関心を持っている者は、このような異常気象の実態についてより適切なより精細な知識を持ちたいと思うのが普通である。異常気象を大気大循環の変動と結びつけて解説した書物はこれまでにないわけではない（たとえば講談社ブルーバックシリーズ 和田英夫他著、異常気象）。本書の特色は、まず異常気象の実態を全体の約半分を費して豊富な資料を駆使して具体的に示し、次いで後半で異常気象の原因となるのではないかと危惧されている全地球規模の環境汚染の現状と、その天候への影響をまとめた点にある。

前者については著者が日頃、気象庁の長期予報担当の

予報官として、大気大循環の変動と各地の天候の変動を多年にわたって注意深く見まもり、研究を続けた結果の結晶ともいうべきもので、まさに著者の分身を見る感じがする。環境汚染については、昨年の人間環境会議に関連して行なわれた SMIC 研究会議でもとり上げられた（本誌19巻2号参照）問題が要領よくまとめられている。たとえば細塵の増加と大気混濁度の増大による日射量の減少、二酸化炭素の増加と気温上昇、SST による成層圏汚染や石油による海洋汚染の気候に及ぼす影響などについて述べられている。

最後に将来の気候予測について著者の見解がまとめられている。

記述は全体をとおして簡にして要を得ているし、図表が豊富に使われていて読みやすい。最近の気象界の話題とも関連して、広く読まれてよい書物である。

（河村 武）